

埼玉の夜明け

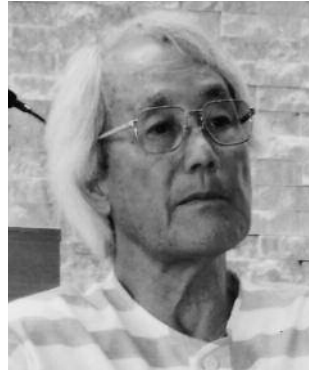
第42巻
第2号
通算131号

日本キリスト教団
関東地区委員会
社会福祉部

沖縄・沖縄教区から見える

日本国・日本基督教団

沖縄教区牧師 平良 修



1 沖縄という鏡を 通して見える日本国

日本国は国益のために沖縄を犠牲にすることができる国家。沖縄を「国内植民地」にし、意識的にあるいは無意識的に沖縄を構造的被差別状態に置いていく国家である。私にとって沖縄の心とは、日本人になりたくてなり切れない

心である。と元沖縄県知事はつぶやいた。何のわだかまりもなく、私は日本人です。と言いきれないものを感じる沖縄県民は多数いる。私は日本国民ではあるが日本人ではない。沖縄人だ。と。日本国への不信感、少なくとも違和感がそうさせる。

「琉球処分」・・・一八七九年。明治政府は琉球王国を滅ぼして日本国に強制併合し、「沖縄県」とした。それを「琉球処分」と呼ぶのは、その任にあたった日本国高官の肩書きが「琉球処分官」だったことから来る。琉球王国は日本国によってゴミのように処分されたり、罰として処分されたりするいわれは全くない。でも日本帝国は「琉球処分」とした。

アジア・太平洋戦争の最後の段階で戦われた沖縄地上戦。それは「皇土」と呼ばれた日本「本土」と皇室防衛のための時間稼ぎの捨て石戦であった。米軍を一日でも長く沖縄にくぎ付けにするための犠牲になることを強要された闘いだった。住民四名のうち一名は死んだ。もう一つの「琉球処分」である。

一九四五年敗戦。日本は連合軍の占領下におかれた。そして七年後の一九五二年、日本は独立を回復した。その際、日本は沖縄を引き続き米軍支配下に置き続けることを条件にした。沖縄を犠牲にして「本土」は独立したのである。これは昭和天皇の熱心な提案でもあった。何故日本国は沖縄に対してそのようなむごいことが出来たのか。「琉球処分」は重ねられた。

日本国から切り捨てられた沖縄は、その後二〇年間、米軍の過酷な軍事支配下にあえぐことになった。自己解放を求めて沖縄は三つの選択肢を考えた。あきらめて現状維持。独立。日本復帰。その中から沖縄は圧倒的に平和憲法を国是とする日本国への復帰を求めた。それはすべての米軍基地を撤去しての反戦反基地復帰であった。しかし日本国は沖縄の米軍基地を、核兵器再持ち込みの密約まで含めて、そのまま残すことにし

た。沖縄の真剣な民意は完全に裏切られた。これもまた「琉球処分」である。そして処分状況はその後四〇年間続いている。普天間基地問題はその流れの中の一つの出来事ではない。

日本を一〇〇人の村にたとえたら、日本の人口一三、〇〇〇万のうち、沖縄はその一〇〇分の一の一三〇万。全国の米軍専用基地の七五%が沖縄に集中している現実に当てはめると、一人の沖縄県民が七五%の米軍基地を強要され、九九人の「本土」の日本人は九名で二五%ということになる。この不平等、この不正義に大方の日本人は気付いていない。そういう政治を支えている結果責任の重大さに気付いていない。これが現実である。

沖縄のうめきはこの被害者だけではない。他国を攻撃破壊する米軍の前線基地の役割を担わされている加害者としてのうめきもある。ベトナム戦のときベトナム人は沖縄を「悪魔の島」と呼んだという。沖縄は自分の意志に反して加害者にさせられている。沖縄は加害者にされることをも拒絶している。

米軍基地がなくなれば沖縄は経済的に困るのではないかの問いをよく受ける。その人は、経済的に保障されているのであれば米軍

基地と共存していいのではないかとでも言いたいのだろうか。軍事基地と共存することで経済的安定を図ろうとする非人間的生き方を沖縄は断固拒否する。かりに米軍基地がなくなったら、沖縄は跡地を平和利用することで何十倍もの収益を得ることは確実である。軍事基地は生産をしない。沖縄の県民総所得が毎年全国最下位なのは、生産力を持たない軍事基地が沖縄を覆っているからに他ならないからだ。

普天間基地を閉鎖して辺野古に代替基地を建設する問題で、日米両国が動揺している。鳩山元首相はいくらか良心的に、全国知事会に普天間の代替基地を引き受けよう打診した。知事たちの答えは例外なく「ノー」だった。何故彼らは断つたのか。それは米軍基地が悪いのだと知っているからである。良いものであったら、逆に奪い合うのではないか。悪いものだから全員「ノー」。その結果はどうなるか。彼らが拒絶する悪いものが沖縄に残ることになる。悪いものはこれまで通り沖縄に。これが「本土」の民意なら悲しいことだ。政府は「本土」の民意は尊重して「本土」への移設を断念し、八〇%以上が反対している沖縄の民意は無視する。これは差別以外の何物でもない。自民党保守

派の沖縄県知事ですら、差別の臭いがする」とまで言い出している沖縄の現実。

沖縄解放のために国連の人権組織に訴える運動が沖縄の青年たちの間に生まれている。彼らは「琉球弧の先住民族会」を結成し、国連に働きかけている。その結果国連は日本政府に、沖縄の被差別状況撤廃を求める勧告をすでに複数回出している。沖縄解放の声が国連を動かして始めていることも覚えておくべき生々しい現実の一つである。

沖縄には日本からの独立を求め、声は絶え間なくある。独立とまではいなくても、道州制の国土

再編の論議の中で、限りなく連邦制に近い一國二制度の沖縄自治州を求める声が高まっている。最近「沖縄道州制懇話会」は、その方向で沖縄県知事に調査研究報告書を提出した。沖縄は間違いなく動いている。

映画「男はつらいよ」の主人公の寅さんは、沖縄の北部で入院している女性を見舞うためバスに乗った。那覇から目的地に向かつて疾走するバスの両側には何キロも米軍基地の金網が続いている。寅さんはバスの中で眠りっぱなし。朝日新聞の記者が山田監督にたずねた。寅さんはなぜ眠りっぱなしだったのですか。監督は

「日本は強い国」「日本の力を信じてる」「がんばれニッポン」。今年三月の震災以来、テレビを始めとする各マスコミはこんな言葉の繰り返しであったことを思い出す。「がんばれない」人もいるだろう。「弱さを抱え込んだままの」人もいるのではないか。一方的なスローガンが掲げられ、「日本」や「日本人」が強調されるこの国の姿は「みんな主義」とでも呼ぶべき「集団主義」そのものである。特にこの国での「集団主義」は、そのまま「集団無責任主義」と直結している。例えば、今から六六年前の日本に、「欲シガリマセン勝ツマデハ」「一億一心火の玉だ」などの標語があった。これが「敗戦」となると一転、「一億総懺悔」という標語が登場した。

とにか、この種の標語には、初めから「主語」を抜き去り、対象を曖昧にする「日本語と日本人

答えた。寅はバカだからね。この話をヤマトの日本人は自分に当てはめて考えてほしい。自分は寅なのか、それとも、と。

2 沖縄教区から見える日本基督教団

一九四一年、三〇余の教派を合同して日本基督教団が結成されたとき、沖縄には五教派一六教会があった。それらが日本基督教団九州教区沖縄支教区として統合された。そして沖縄戦。終戦後教団は諸教会の戦災状況を調べたが、沖縄については「調査不能」との記録が残されただけであった。一九

の無責任主義」が実によく現わされている。

今年三月の福島第一原発事故は、福島に生きる人々の命を今も損ない、地球規模の核汚染を引き起こした。私たちは、この大事故の根底に、この国の「集団無責任主義」を認めるべきだろう。

それは、「原子力の平和利用」をスローガンに「安全神話」の虚構を積み重ねた結果が、今回の取り返しのつかない大事故を招いてしまったからだ。

日本には「原子力ムラ」に象徴される「〇〇ムラ」と呼ばれる内向的・閉鎖的集団が無数に存在する。そして、これら「ムラ組織の集団」は、集団内で問題意識を持ち、「個」の自律を訴え、集団を批判する者を、徹底して排除する組織でもある。

今、この国に生きる私たちが、「ムラ」を超える「個の自律を目指す私たち」でありたい。同時に、この国の将来に希望を託す私たちが、この国の歴史に「自ら責任を負う私たち」でありたい。

四六年の臨時総会において戦後教団の再編をする中で、「沖縄支教区」はいとも簡単に抹消されてしまった。沖縄の教会は本当に日本基督教団の血の通った一部だったのか。沖縄切り捨てによって実現した戦後日本国の独立と似ていなか？教団には沖縄に対する日本国と似通った体質があったのではないか。この点について教団は公式に沖縄の教会に対して謝罪したのか。戦責告白に押し出されて実現した沖縄キリスト教団との一九六九年合同の際の議定書の前文に、「二〇年以上にわたる両教団の分立は戦争によって沖縄が祖国から引き離されたことに起因する」とある。そこには「教団が沖縄支教区を切り捨てたことによる」との認識はない。日本国が沖縄切り捨てについて公式な謝罪をしていないように、教団も事柄を自分の責任とする自覚が乏しいと思われる。この点、合同議定書の片方の担い手であった沖縄キリスト教団側の不明も問わなければならない。

このような教団合同を問い直し実質化する努力が長年続けられた。ことに沖縄教区は真剣そのものであった。日本との再結合を求めるあまり、合同の内容を吟味すること浅く、問い直さざるを得ない質のものにしてしまった悔いが

沖縄教区にはあった。それを全教団的にとらえなおして修正を加え、あの合同をもっと上質なものにすることに救いを求める思いが沖縄教区にはあった。キャラバンを組織して全国を訪ねた。残念ながら関東教区の反応は弱かった。そして二〇〇二年の教団総会はこの課題に終止符を打った。沖縄教区の心を心としないあまりにも無常な教団総会の決定に抗議して、それ以来沖縄教区は「当分の間教団との間に距離を置く」方針を取り続けている。それに対して教団は、「沖縄教区連帯金」の減額という対抗措置に出た。教団は沖縄教区の反応を伺っているという。沖縄教区は、反応に値しない教団の行為として無視している。

沖縄の心を自分の心とし得ない日本国に似て、教団も沖縄教区の心を心としない教団になってしまった。関東教区で作業中の罪責告白にはこの点はどう反映しているのだろうか。関東教区の折角の罪責告白はこの点をも踏まえた重層的なものである必要があるのではないか。関東教区や埼玉地区は、これらの点を踏まえて沖縄教区とどう向かい合おうとしているのか。それが問われているのだと思う。

環境問題講演会

「ブループラネットを

核で汚染させてはならない
—福島原発事故をめぐって—

小川教会 長尾 愛子

去る七月十七日、埼玉地区に
とっては親しい平沢功牧師を講師
に、今回の震災・津波に起因する
福島原発事故の問題を中心とした
学びの機会が与えられました。

私たち市民の多くが、原子力発
電について不安を覚えつつも、エ
ネルギー確保のためにはやむをえ
ない選択として容認してきたこと
は事実です。しかし、実は原子力
発電が導入されたことの時代的流
れと背景をお聞きするにつけ、そ
こには非常に政治的な駆け引きが
あったことが分かります。

原子爆弾の被害を受けた唯一の
国として核兵器を廃絶させること
は日本政府の責任でしたが、核の
傘、核抑止力論に立ってこれを容
認して来ました。原爆の放射能被
害についてもアメリカが資料を没
収してしまっただけでなく、日本
政府も健康調査等を充分に行っ
てきませんでした。

そもそも核分裂を瞬時に起こす
のが原爆、時間をかけて進むよう

にするのが原発です。仮に事故に
至らずコントロールできていたと
しても、放射性物質は海に大気に
放出されており、その影響につい
ての検証は不十分です。しかも
チェルノブイリ事故をはじめ、大
小の憂慮すべき事故が度々起こっ
て来ました。

そのような中で今回の大惨事が
起こりました。きっかけは大地震
ですが、この事故は人災です。平
沢先生は人権侵害を繰り返してき
た電力会社が体質を改め、政府が
空疎でない原子力撤退の道を示す
よう求め続けましょうと呼びかけ
られました。たとえば「奇跡の鉱
物」といわれ三千もの用途があっ
たアスベストに発がん性があるこ
とが分かり、人類はこれと決別す
ることができたことを挙げ、首相
が替わっても、政権が代わっても
私たち市民が脱原発の姿勢を貫く
よう根気強く働きかけることが必
要であると語られました。

神がお創りになった世界に対
し、私たちが容認し、その利益を
受けて来た原発によって取り返し
のつかないダメージを与えてし
まったことは、ただ悔いるばかり
ありません。今不安の中にいる多
くの方々、とりわけ幼い者、これ
から生まれてくる新しい命に対し

て重い責任があります。受け止め
られるものではありませんが、今
回のお話を伺い、逃げずに最善を
尽くしたいと思えました。キリス
トがともにいてくださることを信
じて。

埼玉地区に部落解放
関東教区キャラバン
—二〇一一—を迎えて

飯能教会 土橋 誠

関東教区では部落解放キャラバ
ン二〇一一を迎えることを計画
し、六月二五日に大宮教会で発会
式を行い、関東教区および他教区
の方および三〇名が集まって礼
拝を行った。説教は前関東教区部
落解放推進委員会委員長の石橋先
生がご奉仕下さった。その後、
キャラバンメンバー四名及びボラ
ンティア参加者一名を茨城に向

かって送りだした。部落解放キャ
ラバンは茨城、栃木、新潟（佐渡
へも行きました）、群馬、埼玉の
順で順次集会を行った。

埼玉地区では、七月二日（土）
の夜の宿泊を埼玉和光教会にお願
いし、三日（日）はキャラバン隊
員四名が草加教会、埼玉和光教
会、東所沢教会、小川教会に分か
れて礼拝説教、奨励の奉仕をして
いただいた。

その夜、午後六時半から八時半
までの二時間を埼玉地区教会・伝
道所との交流会とし、キャラバン
隊員との交流の場を狭山教会で
もった。日曜日の夜ということも
あり、参加者は隊員と埼玉地区か
ら集まった人とで合計二二名と多
くはなかったが、良い交わりの時
となった。東谷さんから解放セン
ターの働きについて最初に話して
いただき、その後にはキャラバン隊
員五名がそれぞれ自己紹介の歌を
歌って下さり、集った人々もそれ
に手拍子を合わせた。明るく楽し
い雰囲気の中でキャラバン隊員一
人一人の部落解放への思いがよく
伝わってきた。

語り合いの中で、埼玉地区のあ
る教会の牧師から「教会員名簿の
古いものの中に（昭和初期と考え
られる）、会員の名前の上に「新

平民」という言葉が書かれた名簿
があり、当時の教会員たちがどの
ような思いであったのかと思っ
た」といった発言があった。教会の歴
史の事実として重いものがあると
いうことを改めて考えさせられ
た。

キャラバン最終日の四日（月）
は午前中にキャラバン隊員五名と
四・五名の参加者で狭山事件現地
研修が行われた。参加者の言葉に
よると、事件当時と都市化された
現在の狭山市とのギャップの大き
さに驚かされたとのことである。

四日（月）午後二時より狭山教
会ですべての参加者で行われた。約四〇名
ほどの参加者で、なかには大阪か
ら来られた方々もあり、六月二五
日からのキャラバンの報告が行わ
れ、盛会のうちにすべてのプログ
ラムが終了した。



教区社会活動協議会 報告

和戸教会 浅子 和夫

「いま、被災地とともに歩む」を主題に九月一八〜一九日に茨城県・水戸市で第四一回協議会が開かれた。参加者は五八名だった。

初日は水戸教会を会場に写真家・ジャーナリストの桃井和馬さんの講演を、また二日目は被災教会（水戸中央教会と水戸自由が丘教会）訪問と教区内全体の被災状況についてお聞きした。何れも大事な現実の問題として私達に投げかけられた。

桃井さんは震災直後からずっと被災地に入り、継続して関わってこれ、写真家・ジャーナリストならではの生々しいお話だった。桃井さんの活動には『すべての生命にあえてよかった』のテーマがあるように思われる。その内容として次の様なことだった。

人間社会は金儲けを最上と考えている人が殆どだ。しかし、今回の大震災・原発問題に出会い、私達に本当に必要なものは何なのか？無駄なこと、周りに動かされ躍らされていくのは止めるようにしたいと考える。

●被災地で出会った人達は、皆必死になっていて顔がいい。

●お母さんを捜して必死になっている中学生を友達は励まそうと一生懸命だ。

●被災地・女川に入ったが、街は破壊されていた。以北の東北沿岸地域は何れも同じような情景だった。これは広島島の被爆地と重なってみえてきた。

●飯館の森、有機栽培農耕をしていた所も総て破壊されていた。

●石巻では、「さんま」が捕れるようになり、ようやく活気付いてきた。

●福島第一原発では、私達の知らないことがいろいろと起こっている。例えば、原発で働いている正社員でない人は、朝六時から二〇キロ圏内に入り、夜まで働き、へとへとになって戻ってくる生活だ。また、東電副社長の記者会見では重い口を開け「これは人災だ！」との発言があったが、報道関係者の間では「これはヤバイ！ことだ。」ということまで自己規制をかけ、翌朝の新聞などでは報道されなかった等。最後に、世界は金儲けばかりが先行し動いているが、そういったところに価値を見いだすのではなく、必死になって生きようとし、

知恵を働かせて生きる。そういった地球に立ち返ることが必要との言葉で、お話をまとめられた。二日目の被災状況のお話の中では今回の大震災・原発事故は各教会信徒にも桁外れの被害をもたらしており、これからも色々な形で継続的な支援をしていくことが必要であることを確認しあった。

二・一集案案内
日時・二月一日(土)
午前一〇時〜正午
会場・大宮教会
演題・「未定」
講師・関田寛雄氏
(青山学院大名誉教授)

社会委員会報告

(二〇一一年度)
●社会活動報告
●環境問題講演会
七月十七日(日) 十五時〜十七時 大宮教会
講師 平沢 功牧師(北千住教会)
テーマ「ブループラネットを核で汚染させてはならない」
参加人数 二二教会・伝道所 四十八名
●八・一五集会
八月十五日(月) 十時〜十二時

大宮教会
講師 平良 修牧師(沖縄)
テーマ「沖縄教区から見える日本国・日本基督教団・基地問題」
参加人数 三七教会・一〇〇名
講師と懇談会…十三時三十分〜十五時 一階会議室
参加人数 三四名(希望者)
●第三回社会委員会八月十五日
日時 八月十五日(月) 十五時半〜十六時半
場所 大宮教会 一階会議室
出席者 十名
欠席者 無し
開会礼拝 本間一秀牧師

(土) 午前十時〜十二時
場所 大宮教会
テーマ 未定
講師 未定
四、各小委員会の報告
①平和と天皇制問題
特になし
②部落差別と人権問題
キャラバンについて、土橋地区委員が、書類にて報告する。
③環境問題
七月十七日に、講演会実施
長尾愛子氏に原稿依頼
九月十八、十九日の水戸教会での社会活動協議会に、参加者を各教会で募る。
講師は、桃井和馬さん
六、次回の第四回社会委員会は、十月十六日(日) 上尾合同教会 十五時〜

編集後記

今年度の環境問題講演会「原発問題」、八・一五集会講演会「沖縄問題」は、いずれも現在の私達の身近な問題として、重く受け止めていかなければならないことです。当日出席できなかった多くの方々にも是非お読みいただければと思います。(浅子)